

立原正秋全集

第八卷

立原正秋全集

第八卷

角川書店

立原正秋全集 第八卷

昭和五十八年四月十二日初版発行
昭和五十八年五月十五日再版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573408-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集 第八卷 目次

美しい城

五

春のいそぎ

一七

枯野

三二

行く川

三七

曠野

三八

解題

武田勝彦
四九

美しい城

第一部 春の死

五つとせ、いびられ通しの院生よ

いつかは役人を殺らしちやおう

(ある時期、ある少年感化院の少年達のあいだで愛唱された数え歌より)

「お兄さん、俺を教えるつもりかよ」

と少年は私を見るなり言った。

少年は、細くしなやかで鞭のような軀をしていた。まだ花冷えの季節だというのに、上は白い運動シャツ一枚、下は軀にびったりついたデニムのズボンを穿いていた。三日前の午後、私が彼の母親と会ったときの話では、どこでもよいから大学に入りたい、ということだった。

「みんな俺を教えられずに帰って行ったぜ」

少年は私を脅迫するように言った。

「教えられるか教えられないかは、やってみなければ判らんだろう」

私は、彼の鋭い視線を受けとめながら答えた。このとき、彼の伯母が茶を運んできた。彼の伯母が出て行くまで、私と彼は視線をかわ合わせたままでいた。やがて伯母が部屋から出て行った。

「やめときなよ。いったい俺になにを教えるつもりなんだね？」

少年はさっきよりふてぶてしい態度になった。

私は、目の前にいるこの少年が好きになりそうな気がした。いいかえれば、かつて私が歩いてきた道を、この少年が歩いているような気がした。この少年のような家庭環境では、子供はだいたい軟弱になり、そして不良になり、要領のよい性格になり、罰せられると青菜に塩をかけられたようなだらしない者になるのが殆どだが、この少年は、家庭教師として訪ねてきた私の前で軟化しなかった。

「やめときなよ、と言われても、やめるわけにはいかんね。まあ、言ってみれば、俺は君にアドバイスするだけの役だ。勉強はきみがやるんだからな」

「アドバイスだって？ 出来るもんか」

「君はなにがいちばん出来ないんだね？」

「ああ、それなら教えてやろう。俺は学科ならみんな出来ないね」

「それで、学科以外になにが出来る？」

「それなら喧嘩だ」

少年の目は隙かに私に逆らっていた。

「どうだろう。それでは手はじめに喧嘩から教えてやろうか」

私と少年の視線は相変らずかち合っていたが、私は彼にやわらかい目を向けていた。

「なんだって？」

今度は少年が意外だといった目を見せた。

「君のこれまでの喧嘩の歴史でもきかせてくれないか」

私は間をおいて話しかけた。

すると少年の目は俄かに精彩を帯び、これまで何人と喧嘩をしてどのように張り倒してきたかを、備に語りだした。喧嘩に勝ってきたことは、彼のこれまでの十七年の生涯のなかで、ただひとつの矜りであった。

私とこの非行少年とのつきあいは、このような出逢いから始まった。依田祐一。これが彼の戸籍名であった。通称は祐坊、しかし、後に彼の名をもっとも耀かしめた通称は、弁天のハート破り、という世にも優雅な渾名であった。あるいはただ単にハート破りの祐、もしくはハート破り、そして竟にはハートというだけで、人々は彼の鞭のようなしなやかな軀を連想することが出来た。心臓破り、というより、ハート破りの方が優しさに富んでいる、と言った者もいた。

教護院とは、不良児、つまり非行少年を、一般社会から隔離して教育し保護するところである。教護院のほかに少年院とか感化院とかその他さまざまな名称が役人によって冠せられてきたが、私には、少年刑務所という呼称がいちばん適切のように思える。しかし、歴史的呼称はやはり感化院であらう。ここには懐かしい響きが籠められている。人々は感化院、ときいただけで、そこに収容されている非行少年をおもいかべて眉を顰める。

しかし、このような視線にもたじろがず、非行少年のうちの或る者は、孤独のうちに、積み重ねてきた非行そのものを自分の倫理に転化して行く場合があり、弁天のハート破りは、そんな稀な一人であった。

弁天のハート破りという渾名は、彼が最初の感化院を出てきた直後につけられたのであった。私は、ここに、いままおその苛酷な美しさに耀いている存在のため、ハート破りが入っていた感化院の場所を、まったく架空の土地に設定しなければならぬ。

私が彼と出逢った頃、彼は高等学校二年生で、まだ感化院の経験もなければ、もちろん弁天のハート破りという渾名もついていなかった。

彼の家は、横須賀線の鎌倉駅から歩いて十分とはかからない扇ヶ谷津というところにあり、家の庭には大きな櫛の樹が一本そびえていた。彼の母は横浜でバーを経営しており、夕方の四時になるとバーに出るために家をあけ、帰宅

はいつも終電車であつた。そのほか家には母親の姉である独身女がいた。つまり彼の伯母で、この伯母が女中代りに家事いっさいをみていた。

私のみたところ、彼の母は四十歳前後で、まだ充分に美しかった。目尻がややさがっているお亀型の顔で、もし夫に死別されなかつたら、仕合せな生活をおくれる女であつた。

出来れば私は弁天のハート破りの名を遠く時間の果てまで伝えたい。もし私が彼と同じ感化院出身者でなかつたら、彼の犯したいくつかの罪は、私の魂にとってなんの所縁ゆかりもなかつただろう。

私は彼と急速に親しくなつて行つた。私は彼に教える以前に彼の友人であつた。

ある日私は、彼の机の上に異様な喧嘩用の武器を見つけた。直径十センチほどの古い革バンドに、自転車のチェーンが縫いつけてあるものだった。

「なんだ、それは？」

と私は彼に訊いた。

「武器だ」

彼は答えた。

そして彼はそれを取りあげると、左手の親指をのこした四本の指に嵌めた。バンドは四本の指にぴったり嵌まり、チェーンのついている方が四本の指の背に見えた。ああ、これで喧嘩相手を殴るんだな、と私は直感した。

「そんなもので殴つたら相手はひとたまりもないだろう」

「使うことはめつたにないよ。いつも素手でやるが、なかにはあぐも匕首を吞んでいる奴がいるんでな、そんな奴とやるときは、こつちもこれを使うんだ」

彼はチェーンのついた武器を嵌めた左手を数度前方に突きだしてみせた。

「それでやったことがあるのか？」

「一度だけだ。日高の番長に眼づけがんづけされたときだった。先生が俺に教えにきた頃だよ。俺は、奴の頬にこいつを当

てて捻ってやった。眼づけしてきたのは奴の方だから、奴、泣きねいりさ」

番長とは、平安時代、中衛府、近衛府、兵衛府、などの舍人の長をつとめた者のことで、このような優美な古語が、現代の非行少年の長に冠せられているのを、私は面白いと思った。眼づけというのは、相手をじろつとにらむ、という意味で、眼を相手の眼にぶつけることだった。非行少年同士のいわれのない喧嘩は、たいがいこの眼づけからはじまる。私の旧制中学時代にもこの眼づけはあった。正確には、眼を相手の眼につける、という意味だろう。

私は週に二回、火曜日と土曜日に彼を教えに通った。私が彼のチェーン武器を見た日は土曜日で、彼の家に通いだしてから四回目であった。私は学科については彼になにひとつ教えなかったし、彼もその件にはふれなかった。そのかわり、共通の話題、つまり喧嘩について四回話しあった。彼の学科をみてくれないか、と私に頼みにきたのは、私の知人の奥さんだった。その奥さんと彼の母親が知りあいだったのである。

「石見さんのような喧嘩のつよい人でないと、教えられない子らしいのよ」

とその奥さんは言いながらわらった。

「とんだところを見込まれたものですね」

私はその奥さんから、前任者がごとく失敗して引きさがったことをきかされた。

私が感化院に送りこまれたのは旧制中学三年生の春で、七か月間だった。私が少年院に入ったとき、少年達のあいだで連綿と受けつがれている教え歌の最後に、つぎのような一節があった。

十とせ、どうせ果てるなら刑場の

露と消えましょ名もなしに

この教え歌には感傷がふくまれていなかった。自分をこの感化院に送りこんだ者、またここで自分をいびる役人共を、いつの日にか殺らしてしまおう、という苛烈な精神を具えた少年が何人かいた。このような少年にとって処刑場

は金色燦然とした臨終の場であった。事実、感化院が私の精神形成にどのような役割を果たしてきたか、私は自分でもいまだにそれを明確に分析することが出来ない。当時の仲間のうちのある者は、彼の希望通り処刑場で果てたのがいた。私がそれを知ったのは戦後数年経ってからである。私は処刑場に行かずに作家になった。もし刑場で果てたかつての仲間が生きていて私のことを知ったら、彼は私のことを墮落したと言いかも知れない。しかし私が作家になったのは、私が語るべきものを持っていたからである。このほかにはどんな理由も見当らない。

話をハート破りに戻そう。

私が感化院出身者であることを知ったときの彼の目の輝きを、私はいまだに忘れることが出来ない。彼は自分の父を記憶していなかった。物心ついた頃、彼の母にはすでに男がついていた。妾という存在を知ったのもその頃であった。以後、この少年がどのような道を選んで歩いてきたか、私には手にとるように判った。彼の苦痛や淋しさには吐け口がなかった。それは社会の偏見に当って自分に跳ねかえってくるだけであった。

数え歌のひとつにつきのような一節があった。

二つとせ、ふたおや知らない院生に
俺おれらもきょうから仲間入り

感化院に送りこまれてきた少年達には、両親のいない者がかなりいた。彼等はずっとも苛烈な存在だった。片親でもいる奴は彼等ほど苛烈になれなかった。両親がいる奴は両親のいない少年からよくいびられた。

「おまえ、両親がいるのに、なんでここに入ってきた？ え、おい、間違っって入ってきたのか。おまえのような奴が入ってくると、感化院から光背が消えちまうじゃないか」

と言うのが両親のいない者の科白であった。感化院から光背が消えるのを彼等はずっとも懼おそれていた。

ハート破りは、両親がいなくても同然な幼年期をすごしてきたらしかった。

私が感化院出身だと知ったときの彼の歎びを想像してもらいたい。つまり非行少年として私は彼の先輩であった。彼にしてみれば、はじめて語りあえる年上の人を見つけたわけであった。

その時分、私は、鎌倉の街の夜警員を勤めていた。彼に言わせると、それまで自分を教えにきた奴等はすべて、知識階級に属するにんげんだったそうであった。彼の裡ではやくから文化人とか知識人とかにたいして嫌悪感が芽生えていた。

「ぶっている奴を見ると、唾を吐きかけて殴りたくなってくる」

と彼は言った。

したがって、感化院出身者で夜警員を勤めている私は、彼の裡に一夜にして理想像として宿ってしまったのであった。私はいつも独りで歩いてきたが、私がそのことを語ると、俺もいつも独りで歩いてきた、と言った。これも彼の裡に共感を喚びおこしたらしかった。

「なんだってね、徒党を組むのは弱い奴等のすることさ」

と彼は言った。

やがて四月も終ろうとするある日の暮方、私が夜警詰所に出る支度をしているところへ、彼が訪ねてきた。

「すこし、学科を勉強したいと思うが、どうだろう、先生……」

彼は私の目を見てもおぼろげに言った。

「悪くはないな。しかし、なんだな、途中でいやになり抛なつようでは困るから、かんたんに、では教えてやろう、というわけにはいかんな」

「俺は途中で抛なつのはきらいだ」

「そうか、それなら教えてやろう」

彼は、おためごかしの意見をする者を好まなかった。厚意によって自分に与えられたものが、真実の厚意によるも

のか、それともおためごかしかを、彼は敏感に嗅ぎわけていた。

それから私達は喧嘩の話をやめ、週二回学科を勉強した。

彼はよく夜になると夜警の詰所に遊びにきた。彼は実に人懐っこい顔で詰所に現れ、私が夜の街を見まわりに出るときいっしょに従いてきて、かつての少年感化院の話をせがんだりした。彼の家庭には欠けているものが二つあった。一つは優しさで、一つは夢であった。母親は家にいないも同然であった。店から終電車で帰宅するのは週に三度ほどで、あとは曉方に車で帰宅するかあるいは翌日の昼間のこともあった。このような家庭では、一人の少年が正常な夢を紡ぐ場が見当らなかった。家事は姉にまかせ、学校は教師に任せておけばよい、と彼の母は考えていたのだらう。そうした一人の少年にとり、私は友人であり兄であり得た。

彼が事件をおこすまで、私達はすべてうまく行っていたし、彼は生来の心優しい少年に還りつつあった。

雨のすくない夏であった、と私はその年の七月をいまでもはっきり記憶にとどめている。まだ海岸道路が舗装される前で、白っ茶けた砂地の道は乾ききっていた。防風林の松林は潮風で陸地にむかって傾き、海にちかい方の松は風で葉をむしりとられて枯木のようになり、あたりは荒寥としていた。ことにこの年は荒寥としていた。なぜこの年だけ荒寥としていたのか、私は後になって、少年が事件をおこした夏だったからかも知れない、と思うようになった。樹木は、潮風と太陽に灼かれて、葉という葉が赤茶けていた。雨が降らず、街なかを貫流して海に流れこんでいる滑川も、上流は川床がひび割れ、湿度のたかい七月の街にはこりがたちこめ、人々は熱気で喘いでいた。

その日、警官が私の家に現れたのは午後二時頃だった。

「依田祐一の家庭教師をなさっている石見さんですね」

と警官は私を見てきいた。

「そうですか……」

私は、少年がなにか事件をおこしたな、と思った。